

“ ニ ュ ー ス ”

～文体と音声表現の考察～

Studies on the Style of Scripts and the Way of Announcement in News Casts

吉 川 喬

Takashi Yoshikawa

しばらく前のことになるが、10数年ぶりに放送局の現場へ戻ったあるベテランアナウンサーが、筆者にこう言ったことがある。「どうも、最近の若いアナウンサーのニュースの読み方がよくわからない。最後まで息が続かない。だから、おしまいの方が聞き取りにくい。もっと声を出したらどうかと言うと、いきなり大きな声を張り上げて逆に聞きにくくなる」と。

単調過ぎて、面白みが無いという見方もある。面白みが無いということは、意味が伝わらないということにもなりかねない。

「ニュースは、意味のかたまりをつかんで一気に読む。センテンスをしっかりとらえて読み下して行く」というのが今のリードニュースの基本的な表現方法だと、NHKアナウンス室では言う。当然のことながら、新人アナウンサーの研修はこの考え方を基本に据えながら行われる。

一見単純に聞こえるこの表現方法、しかし、考えてみると基本もままならない新人アナウンサーにはある意味では難しい表現方法だと思う。この表現方法を、新人アナウンサーは十分理解しないまま本番に臨んでいるということになるのだ。冒頭のベテランアナウンサーの発言はこのことをよく物語っている。

*アナウンサーの専門研修は年々短くなる

しばらく前のことになるが、藤久ミネ氏（評論家）が「最近、各局はもうほとんど新人アナウンサーの養成を行っていない。以前は、半年近い研修訓練を余儀なくされたNHKのアナウンサーでさえ、型にはめたくないとの理由で研修期間も方法も大きく異なっている」（『月刊民放』'91/2）と言い、そのことから起こるさまざまな問題点を指摘している。

このことから派生する問題点の有り様についての議論はさておき、確かに、NHKにおける新人研修は、アナウンサーに限らずすべての職種について、期間も方法も変わってきたことは事実である。一頃、といっても、もう二昔以上も前になるが、筆者の経験も交えて言えば、新人研修は藤久氏がいう“半年”はなかったが、1か月から2か月近くはかけていた。方法も、いわゆる職種ごとの専門研修に、多くの時間を割いていたという記憶がある。

それが、昨今の研修は、トータルで2週間、その中でいわゆる専門研修はわずかに1週間。見方によっては、研修の“基本”はこれで十分ということも言えるのだろうが、結果として新人の“研修の残り”は現場にゆだねられることになる。ところが、現場は年々忙しくなっている。したがって、現場では新人の研修に割く時間的余裕も人的余裕もない。

一方、十分な研修を受けないまま現場に配属された新人たちはどうか。研修が十分行われたかどうかにかかわらず、ただちに“一人前”の専門職として仕事を始めることになる。とすれば、アナウンスメントという専門分野は別として、藤久氏の言う「型にはまらない」伸び伸びとしたジャーナリストが育つ可能性はありそうだ。

ところで、かつてNHKは専門別に職員を採用していたが、現在は「放送一般」として採用し、一応の“専門”は設けるものの職員すべてに幅広くあらゆる仕事をこなすことを要請している。特に地方局のアナウンサーの場合、現場で担当する仕事から見て、アナウンサーであってアナウンサーでなく、アナウンサーでなくてアナウンサーであるという、何やら禅問答めいた言い方が当てはまるような立場だと聞く。“人”が少ない民放局の場合は、ある意味でもっと進んでいると言えるだろう。

放送の職種でいえば、「記者」は主たる業務が取材であり、自分の取材したニュースをレポートもしくはトークという形式で伝えることはあっても、音声表現は“専門”ではない。「制作」の場合は恐らくもっとはっきりしており、自分の企画をレポート（音声表現）することはあっても、主たる業務は企画から制作までであることがはっきりしている。

アナウンサーはどうか。主たる業務はアナウンスとされている。が、現場では、やれ企画だ提案だ、やれ取材だイベントだと追いまくられ、その合間にアナウンスをするというのが実態ではないか。

20年前に比べ、いや10年前にくらべても、特に地方局の放送現場は大きく変わっている。放送現場にいる職員は、当然のことではあるが全員がジャーナリストであることを要請されている。一人一人がジャーナリストとであるという“意識”は、10年前も20年前もいや30年前もそうだったと言えるが、今は意識だけではなく、組織全体が、そして仕事の有り様がそのように変わってきた。専門の範囲を越えて仕事をすることを要請されている。結果として、そのことが機能しつつあると言えるのだが…。

一方で、それぞれの“専門能力”の低下が心配されていることもまた、事実である。特に、アナウンサーについてはそのことがはっきり言える。NHKアナウンス室の幹部も、このことでは頭を抱えている。

もちろん、それは、かつての専門能力に極めて優れた“いわゆるアナウンサー”と比較しての見方ではあるが……。冒頭の議論はこのことと密接な関連がある。

*リードニュースの伝え手に必要とされるものは何か

リードニュースの歴史は長い。大正14年3月22日、日本で初めてNHK（当時は、社団法人東京放送局）によって放送が開始されて以来、73年連続と続いている。今テレビで放送されているニュースにはさまざまなスタイルがある、と言える。NHK、民放を問わず、リードニュース（原則としてアナウンサーが原稿を読む）はニュースの基本型として依然として健在だが、一方で、キャスターニュースあり、トークニュースあり、レポートありと、ラジオからテレビ

へ、技術革新、放送の発展とともに、ニュースの伝え方、そしてニュースの質は大きな変化をとげてきた。

伝え手も、アナウンサーだけがニュースの伝え手だった時代から、今は伝え手の自由化の時代だとも言われている。

ところで、筆者がNHKに入った昭和35年、まだラジオが全盛の時代であり、テレビは全国的にそれほど普及はしていなかった。地域でのテレビ番組（ローカル番組）は始まったばかりで、各地域ブロックの中心となる放送局単位で制作をしていたに過ぎない。地域ニュース（各県単位のローカルニュース）はまだ始まっていなかった。

したがって、地方局にいるアナウンサーが「ニュースを読む」ことは、ラジオニュースを読むことであった。音声波のラジオである。そこでは、現在のような多メディア、多チャンネル時代のニュースとは違って、基本的な、あるいは伝統的なニュースの伝え方（読み）が要求されていたように思う。

『NHKアナウンス読本』（昭和45年版）はこういう。

……ニュースは難しい。高度の表現技術を要求する。ニュースを人並み以上にこなそうとするためには、第一にすぐれたニュースセンスを磨く必要がある。……ラジオニュースは、アナウンス技術として、特に明瞭な発音、発声、そして間のとりかた、緩急等、テレビアナウンス以上に高度のアナウンス技術を駆使して……。

研修もこの基本線に沿って実施されていた。発声、発音、アクセント、イントネーション……と、長い時間をかけて教育されたことを記憶している。もちろん、長い時間をかけた研修は、音声表現の基本にだけ費やしたのでないことは言うまでもないが。

歌の世界で、よく「最近の若い歌い手は口先だけで歌っている」と言われる。技術の進歩が“口先”だけであることをカバーしてくれる。が、やはりベテランの歌手がよく言う「歌の基本は発声」にあるようだ。

同じことがアナウンサーの世界にも言えるという人がいる。NHK放送用語委員会でも、このことがよく指摘される。特にラジオニュースでは耳だけが頼りである。したがって、そのこと——つまり、発声・発音の基本がしっかりしているかどうか——がよく分かれると言われる。放送用語委員会で委員の先生方が、いいアナウンスを聞いた時「さすがにベテランアナウンサーですね」と言うのは、単に経験が豊富だという意味だけではなく、いわゆるアナウンスメントの基礎がしっかりしていることを言う発言だと受け止めることができる。

最近、ラジオの聴取者（特に中高年者）にすこぶる評判がいいと言われるNHKのラジオ番組「ラジオ深夜便」もこのことが深くかかわっていると思う。つまり、“ながら”聴取ではなく、深夜一人でじっくり聞こうとする聴取者には、伝えての心が聞き手にきちんと伝わるアナウンスが必要だということであろう。

ところで、ニュースを伝えるためには、発声、発音、アクセント、イントネーションが正しく、その基礎がしっかりしていれば、それでいいというものではない。その上に、いやそれ以上に必要なものは、ニュースそのものの理解力、把握力そして表現力であろう。ニュースを理解するジャーリスティックなセンスは、いつの時代にも問われてきたことではあるが、表現力に限って言えば、ラジオ時代は音声だけの表現力でよかったのだが、テレビ時代は、そこにブ

ラスアルファが要求される。つまり、総合的な表現力が要求されることになる。

* リードニュースの伝え方はどのように変わってきたか

渡部卓能氏（故人・当時アナウンス室チーフアナウンサー）が、平成2年度校内放送指導者講座で、アナウンスの基本について次のような話しをしている（『放送教育』'91/5）。

……かつて、NHKのアナウンスに「詠嘆調」というのがありました。映画のトーキーのような調子です。……「詠嘆調」が過ぎると、今度は「淡々調」という風が変わってきました。「淡々調」というのは、表面に自分の感情を出さないでできるだけ素直に読んでいくというものです。……今は「語りかけ調」です。日常の会話の中で話しかけるあの調子です。読むこともアナウンスをすることもできるだけ自然なふだんの口調が大切なのです。そうすれば、内容が正確に相手に伝わることになると思います……。

70年を超えるNHKの放送の歴史の中で、ニュースを伝えるアナウンスは今も昔も変わりなく続いている。ただ、伝え手が、アナウンサーだけだった時代から、そこに取材職が、そしてその他のパーソナリティーが加わってきたことや、特にテレビの世界では、放送技術の進展とともに、ニュースの伝え方、表現方法が大きく変化してきたことはいうまでもない。

渡部氏の話は、この70年を超えるニュースアナウンスの歴史の流れをかいつまんでよく紹介していると言える。

が、この辺はもう少し詳細にみてみなければならない。

古いニュース映画が、最近でもテレビのニュースやその他の番組の中で使われることがある。そこで耳にするアナウンスはいかにも古いという感じを受ける。それは筆者だけではあるまい。つまり、これが渡部氏のいう“詠嘆調”なのであろう。“詠嘆”ということばがそぐわなければ、“自分の調子”だけで読んでいるということであろう。いや“読む”というより“読み上げた”、もっと言えば“歌い上げた”調子と言った方が正しいかもしれない。“声に酔っている”、“調子に酔っている”とも言えそうだ。

この点でよく引き合いに出されるのが竹脇昌作氏のアナウンスであらう。竹脇氏は昭和9年、NHKが正式に採用したアナウンサーの一期生の一人で、研修中にNHKを辞めたという。その後、独力で、ニュース映画のアナウンスに新境地を拓いた人である。今でも多くの人の耳に焼き付いていると思われる一種独特の調子は、一世を風靡したものだ。そして、NHKの中でも、初期のテレビニュースなどで、この種の“調子”が聞かれたことがあった。

が、この種の調子はNHKの中ではそう長くは続かず、やがて“淡々調”へ、そして、“語りかけ調”へと変わっていったと思われる。

ところで、戦前のアナウンスには、“雄叫び調”というのがあったと聞く。戦時中、国民の戦意高揚を求める風潮の中で、放送におけるアナウンスも力強くあるべきだとした議論はうなずける。すべてのアナウンスがそうだったとは思えないが、特に戦争に関わる、また特に日本軍勝利へつながるニュースのアナウンスは、力強い“雄叫び”調が必要だったのであろう。

“雄叫び調”は、恐らくトーンの高いもので、耳だけのラジオであるから、聞く側にもかなりの緊張を強いたものと思われる。世の中が一方へ傾いて動いている時はそれでよかったです

あろうが、戦後、世の中が落ち着きを見せるに従って、“雄叫び調”もその使命を終え、新しいアナウンスに変わっていったのであろう。

その中から、例えば、ニュースは客観的に落ち着いて伝え、また聞いてもらうという発想で、今につながる“淡々調”というニュースアナウンスの基本が出来上がったものと思われる。

『文研月報（62/3）』に、当時のベテランアナウンサー等による「アナウンスメント・テクニク」に関する座談会が載っている。その中に以下のような興味深い発言が見られる。

松野—戦争前のアナウンスには、親近感などというものはほとんど打ち出されていなかった。藤倉—大衆との接触は、あまり戦前はなかった。戦前のニュースはわりに硬い調子だった。松野—文章に手を入れないで、調子だけでいわゆる親近感を出すということは大変むずかしい。

井口—ニュースのように時間的な制約の中でできるだけ多くのことを伝えるのに“話しかけ調”はとれない。ニュースの場合、特殊な文体が要求される。

松野—現在の放送文章と“話しかけ調”のアナウンスとの間にはミゾがある。アナウンスをする上にも困難が伴う。

今福—比較的顔が出るニュースの場合、文章をそのまま読むわけにはいかない。やはり“話す調子”になる。顔が出た時に、書き文章が出てくるとやりにくい。

植地—ニュースのアナウンスで、“話しかけ調”で親近感をもたせようとする、聞く側にその調子やことばづかいに抵抗感が生じる。

井口—文体は話しことばより書きことばだから、アナウンサーがそのニュースを読んで“話しかけ調”にすることは無理だと思う。

小林—ニュースはなるべく“話しかけ調”にしてほしいということは、一つには「センテンスを短く」してほしいということだ。

この座談会の中に、ニュースの文体や音声表現上の、示唆に富んだ指摘がいくつか見られる。後述するが、ここで言われている「音声表現とニュース文体との関わり」は、今だに解決のつかないそれでいてニュースの最大の課題だと言える。

*ニュースの伝え手の意識はどのように変わってきたか

特に地方局において、アナウンサーの仕事が複雑多岐にわたることはすでに述べたとおりであるが、少なくとも、肩書きとして“アナウンサー”がつく以上主たる業務は「音声表現」と考えていいであろう。音声表現と一口に言っても、その業務はまた多岐にわたる。ところで、近頃、テレビジャーナリズムの世界でのやりりのことばに「自分のことばでしゃべる」というのがあつた。アナウンサーに限らずテレビの世界で、ジャーナリストとして生きて行こうとする人たちは、必ず一度はこのことばを口にする。ここで言われる「自分のことばで」というのは何を意味するのであろうか。恐らく、「与えられたものではない文章」「借りものではないことば」「自分の取材したもの」といったようなことを指すのであろう。

音声表現の分野を担当するジャーナリストとして、大事なことではあるが難しいことでもあ

る。

まず第一に、ジャーナリストとしての自己をどう確立していくのか。そして、その上で表現力をどう身につけていくのか。「言うは易く、行うは難し」であろう。

この点について、秋山和平氏（当時NHKアナウンス室長）は、次のように発言している。「アナウンサーは、これまで常にNHKの問題状況を先駆的に体験してきました。テレビの大衆化など放送状況の変化や、いわゆる『NHKアナウンサー調』論議以来、外部を含め表現者の自由化の中で自分達の仕事の有り様を模索してきました。そして、そのNHK調なるものを、単に表面的な表現形式上の次元にとどめず、より本質的な、伝えることばを担う者の仕事への関わり方に根差した問題としてとらえてきた」（NHKアナウンス室部内紙『週刊アナウンス』VOL97）と。

このことばは、NHKアナウンサーの70年を超える歴史のなかで、特にテレビ時代の40年強、常に新しい“表現者”確立への努力を積み重ねてきた集団としての姿勢をよく表している。よく言われるトーキングマシンからの脱却、ジャーナリスト集団への飛躍、取材も制作もできるアナウンサーへなど、ことばを並べれば涙ぐましい歴史の軌跡を描くことができる。

しかし、こうした動きが、見える形で具体化したのはそう古いことではない。わずかにここ10数年ではないだろうか。

ただその芽生えは、昭和30年代にすでにあったことが先に示した「座談会」でも若干うかがい知ることにはできる。が、具体的なものとしては、昭和40年代前半のNHK仙台局から始まったことを指摘することができる。

当時、昭和28年に始まったテレビは10余年を経過し、関連器材の充実とともに、放送メディアの本流はラジオからテレビへと変わっていた時代である。

テレビメディアの中に「レポート」ということばが生まれたのはこの頃である。フィルム構成番組に替わり、レポート番組が多く制作されるようになっていた。余談だが、「リポーターとしては、取材力のある記者がふさわしいのか、それとも表現力のあるアナウンサーが適任なのか」といった議論が、現場では真剣にたたかわされていたという記憶がある。

この時、NHK仙台局のアナウンサー集団は、仕事の中心に「レポート」を据えることになった。当時、仙台局アナウンサー集団のデスクだった陶山一郎氏（現・横浜在住）は振り返ってこう言う。「テレビの報道番組の中で、レポート形式の番組が主流になることははっきりしていた。アナウンサーもジャーナリストとしてそこに積極的に関わる必要があると判断し、仕事の中心をそこに置いた。その選択は間違いではなかった。自分で企画をし、自分で取材をし、自分のことばで伝える。レポート番組に深くかかわることによって、一般の『ニュースを読む』姿勢も表現の仕方も大きく変わらと思った。テレビの世界では、できる表現者が必要である」と。

昭和43年5月、朝日新聞が「NHK」を取り上げ、その連載の21回目、「アナウンサーの意味」の中で、NHK仙台局のアナウンサー集団を中心とした新しい動きについて次のように書いている。

……放送ジャーナリズムの明日の主演はだれかで記者・アナウンサー・プロデューサー三者間で、いま、ひそかな主導権争いが始まっている。アナウンサーたちは言う。きのうまでの事務員さんたちにも記者・プロデューサーなら何とかやれる。しかしアナウンサーだけは

できない。ニュースの最終のチェックポイントは私だ。修羅場で最後に画面に顔を出すのは私以外のだれでもない。私がNHKだ……。

東北6県在勤のアナウンサーの勉強会で、3つの指針があることを聞いた。①まず人間であれ、②放送ジャーナリストであれ、③技術をみがけ、こういう順序だった。ヘラヘラ底の浅い話術の職人時代は終わった。「放送ジャーナリズムの2巻目を書き始めたところだ」と彼らは語った。……

ここに書かれている“主導権争い”はややオーバーだと言わざるをえないが、「読む」ことが主たる業務であったアナウンサーたちが、新たな仕事を模索し始めていた姿は、先の陶山氏の発言とも合わせてみるとはっきり浮かび上がってくる。新たな仕事の延長線上で、ニュースを“どう読むか”“どのように伝えるか”の議論も盛んに行われ、それが今につながっていることになる。

あれから20数年、平成3年の秋、朝日新聞が再び「NHK」を取材した。その連載記事の25回目に、アナウンサー集団が新しい仕事の有り様を模索する姿を次のように書いている。「……ニュースキャスター時代の到来は、アナウンサーが漠然と感じていた不安を、現実のものにした。……はなし言葉のプロであり、有能なジャーナリストでもあるようなアナウンサーへの模索は続く……」と。

*ニュースの文体はどのように変わってきたか

NHK放送用語委員会でたびたび指摘を受けるものに“ニュースの原稿”がある。

一般にセンテンスが長いこと、難しいことば（専門用語・漢語など）を使い過ぎること、常套表現が多過ぎることなどである。先に紹介した座談会で話し合われていたことが、40年経っても一向に変わっていないということである。

平成2年11月、NHK札幌放送局で開催された放送用語委員会の席上、当時の放送局長（記者出身）が、議題として提出されたニュース原稿を見て「自分の新人時代（昭和35年）の原稿と全然変わっていない。進歩がない」といみじくも言った。かなり自虐的な言い方ではあったが、昔を知らない若い人も含め参加者は一様に思わず笑ってしまったと言う。「なぜ変わらないのだ」という局長の指摘に、現場を預かるデスクの一人が「『ニュースとはこういうものだ』と、自分を含め代々教えられているからだ」とやや皮肉っぽく答えた。もちろん、変わっていないというのはやや誇張した言い方ではあるが、ある意味では当たっている。変わっていないというのは、例えば、「リード部分が長い」「漢語の使用が多い」「書きことばが多い」「常套表現の使用」「全体にセンテンスが長い」などであり、この席でもこの点で多くの指摘があったと聞く。

ここに一つの問題点がある。

古くから放送用語委員会にかかわっている先生方が「ずっと言い続けています」と言いつつ、何10年と同じ事を指摘し続けていることが、ある意味でこの「変わらない」という発言を証明していることになる。

ところで、放送のニュースを、視聴者にとってわかりやすいものにするためには、表言論と文体論の両面から検討する必要があるのだが、どちらかといえば、音声表現の面からの検討に

比較し、文体の検討はそれほど進んでいないということになる。検討はするのだが、そこから先へ進む方法論がなかなか見つからないというのが実態かもしれない。

70年前、放送開始当時の放送局のニュースは、新聞社もしくは通信社の記者が取材し、編集したものをアナウンサーがそのまま読むという形式を取っていた。アナウンサーが“読む”原稿は、あくまでも新聞原稿そのものであった。つまり“書き原稿”である。放送局は、やがて独自にニュースの取材を始めるのだが、ニュースのお手本はあくまでも新聞である。つまり、記者が“書き”、それをアナウンサーが“読む”わけだから、放送のニュース原稿は、新聞の原稿と大差なく、そこから飛躍的にあるいは極端に変わることなく今日に至っていると言っても過言ではない。

先に紹介した座談会でも、このことが指摘されている。ニュースの文体が変わらない限り、音声表現面でいかに努力をしても、正確に伝わらないことがありうるのではないか。読み手の生理——息づかい、呼吸法——に合ったニュースの文体があるはずなのだが、その点はまだ十分追及されているとは言いがたい。

平成2年、関東甲信越のNHKの放送局を対象に開かれた放送用語委員会の席上、「イブニングネットワーク（東京・関東圏内）」の池上彰キャスター（現・NHK報道局記者）は、ニュース文体と読み手の生理に関連した質問に答えてこう言った。「自分は、人の書いた原稿でも、内容を十分検討した上で自分の生理に合わせて読みやすい（話しやすい）ように、そしてわかりやすく書き直す」と。この池上氏のことばから、書きことばを、話しことばに近く変え、文体を自分なりの“話体”として組み直し、わかりやすく伝えていこうという努力のあとをうかがい知ることができる。

キャスターニュースと言われるものの中には、池上氏が言う側面が確かにある。昭和47年、NHKテレビで「ニュースセンター9時」がスタートした時、初代のキャスター磯村尚徳氏は、いままでのNHKには無い新しい「ニュース番組」を作り、そして、自らを日本で初の本格的ニュースキャスターと位置づけるとともに、ニュースの伝え方もガラリと変えていった。さらに、「これからの時代、取材のできないアナウンサーはいらない。トークのできない記者はいらない」と大胆な発言をし、NHK内外に大きな波紋を呼んだ。この発言は、ニュースの伝え手としての資質に関わる基本的なテーマを内外に投げ掛ける結果にもなった。

余談だが、磯村氏の発言に関連して、かつてラジオ時代、アメリカCBS放送局の記者として活躍したエド・マローが、ヨーロッパ特派員時代に言ったということばが思い出される。それは、第二次世界大戦前後、ヨーロッパから伝えられるマローの部下の記者たちのレポートに対して、アメリカの本社から「今度の新人は発音が悪い、しゃべり方がうまくない、ことばづかいが記者らしくない、……」と苦情が来るたびに、マローは「アナウンサーを採用しているのではない。自分の考えがちゃんとと言える記者が欲しいんだ」と突っぱねたという逸話である（『ニュースキャスター』田草川 弘著）。このことは、ニュースの伝え手として基本的に必要とされる資質は何か、ということをも物語っているのではないか。

ところで、磯村氏の発言は、まだ記憶に新しいところだが、あれから30年、民放にも言えることだが、特にNHKのニュースは何がどう変わったのか。

今のテレビニュースは、形式を分ければ、大きく二種類のものがあると言えるであろう。一つは伝統的なリードニュース（依然として、主にアナウンサーが“読んで”いる）であり、

もう一つは「NC9」以来のキャスターニュースである。ただ残念なことには、送り手側の分類はそうだとすると、受け手の側に同じような分類観念はあるのであろうか。否であろう。むしろ“誰”が伝え手なのか、どのように伝えてくれるのかに視聴者の関心はある。だとすると、送り手側が、リードニュースだキャスターニュースだ、またトークだリポートだなどと議論することは、視聴者にとって大して意味を持たない。形式はどうあれ、放送局は視聴者にはニュースをわかりやすく伝えることを心掛ければいいということになる。

*ニュースの文体はどこまでわかりやすく変えられるか

かつて、NHKのニュースは「書かれた文字を一字一句まちがえることなく、高度な音声表現技術を持ったアナウンサーが音声化する」ことが基本の形であった。このことは民放にも言える。今でもその要素がないわけではない。

放送用語委員として、長い経験のある金田一春彦氏（国語学者）と柴田武氏（言語学者）が、放送用語委員会の席上で次のようなことをよく言っていた。「このニュース原稿は、硬いことばが多く文章は長いし、わかりにくい悪文の典型的な例ですが、アナウンサーがうまく伝えてくれています。悪い文章でもベテランアナウンサーがうまく読んでしまうから、ニュースの文体が一向によくなるのではないのでしょうか」と。いささか皮肉のこもった言い方ではあるが、確かにそのとおりのかもしれない。ニュースを伝えるために、音声表現上、いかに高度なテクニックが必要かということでもあろう。ニュースを“読む”アナウンサーは、これまでも述べてきたように、いかにわかりやすく読む（伝える）かという点での研究、努力は怠らなかったと思う。が、池上氏が言うような、ニュース文章を自分なりの判断で“書きなおす”ことは、ニュースの読み手としての“アナウンサー”には基本的には許されて来なかった。

当然のことながら、“悪文”を“下手なアナウンサー”がただ単に“読む”のでは、受け手にはニュースの内容は十分伝わらないと思う。

ところで、すでに触れてきたことではあるが、「これまで放送の世界では、書きことばを話しことばに変えていく努力が主流だった。……アナウンサーにとっての課題も原稿を読むことから語りかけることへとどう転換するかということであった」（評論家・藤久ミネ氏『月刊民放』'91/2）という議論も、「アナウンサーがニュースを“読む”ということばは、私どもにとって死語になっています。視聴者の前に顔を出して物を言うわけですから、『話す』あるいは『しゃべる』というのがあたりまえです」（当時テレビ朝日アナウンス部副部長・高井正憲氏『月刊民放』'91/6）という議論も、音声表現上のものとしてはいずれもこの世界では十分なされていると言っても過言ではないだろう。

問題はその先にある。ニュースを、「書きことばの世界である“活字メディア”の文体（新聞文章）」ではない、「話しことばが中心である放送の世界のそれにふさわしい“文体（話体）”で書くことはできないのかということである。

このことに関して、最上勝也氏（NHK放送文化研究所放送研究部副部長）が次のように述べている。「『放送のことば』一般の特性でもあるが、特に、不特定多数を聞き手に、事実を客観的に伝達することを目的とした放送ニュースでは、『ニュースは話しことばで』とは言っても、ある程度の限界があることは否めない」（『放送研究と調査』'88/10）と。

しかし、「話しことば」でとは言わないまでも、少なくとも「書きことば」ではない、「放送

のことば」でニュース原稿を書くことはできないものか。そこで、ニュース原稿に関してここ数年、放送用語委員の先生方が指摘し、またNHKの放送現場で議論されてきた問題点を、箇条書きに並べて見ることにする（『放送研究と調査』から引用）。

第1045回（大阪）…「ニュースでは何をいちばん言いたいのか、重要なポイントをまず出し、後から説明する方がいい」

第1048回（福岡）…「耳で聞いてわかることばを選ぶこと。専門用語、漢語、外来語はわかりにくいものが多いので、適切な説明をつける必要がある」

第1064回（名古屋）…「事実を正確に伝えるのは大切だが、官庁の発表項目をそのまま出すのではなく、聞き手の側に立った手直しが必要である」

第1099回（仙台）…「ニュースがわかりにくい原因の一つに、文章の順序が、一般の人が理解しやすい話しことばの順序になっていないことがある」

第1159回（首都圏）…「ラジオには字幕も映像もない。短く簡潔な表現でないと伝わらない」

第1160回（広島）…「難しい用語や、硬い表現が耳に連続して入ってくると内容は上手く伝わらない」

「放送用語委員になって40年たつが、その頃と比べてもニュース原稿はあまり進歩していない、変わっていないように思える」と、金田一春彦氏（放送用語委員・国語学者）が言うように、ここにアトランダムに並べた指摘は放送用語委員会のたびに繰り返言われてきたことである。いずれも、当たり前のわかりやすい指摘であり、ニュース原稿には素人の視聴者の立場でも、そのとおりだと言いたくなることである。

つまり、金田一氏の指摘だけではなく、誤解を恐れずに言えば、放送開始以来70年、ニュース文体は基本的には一向に変わっていないように見えるのである。

* ニュース文体の検討はどこまで進んできたのか

これまで、ニュースの文体論や音声表現論に関連して、NHKの放送用語委員会について触れてきたが、そもそもこの放送用語委員会なるものは、放送が始まって間もない昭和9年1月に「放送用語並発音改善調査委員会」として発足したものである。

委員は学識経験者ら7人で構成され、当初は、「発音改善」という名称でもわかるように、主として発音やアクセントについて議論がなされたという記録がある。つまり、放送開始当時は、アナウンサー研修などというものも十分ではなく、新聞記者から転出した人など放送（アナウンス）はまさに手探り状態でスタートしており、特に東京以外の放送局では、標準語もままならないアナウンサーがいたなどということもあり、そのあたりの改善も必要だったことがわかる。

同時に、委員会が発足したあたりから、前にも触れているとおり放送局では独自にニュースの取材も始まっており、当然のように、新聞とは違う「放送におけるニュース原稿の有り様」の模索も始まったのである。

昭和10年3月、委員会は「放送用語の調査に関する一般方針」を打ち出し、その中で「…放

送用語の調査は、美しい語感に富む『耳のコトバ』を建設し……」（『放送50年史』より）とうたっている。放送は、特に当時はまだラジオしかなく、耳が頼りなのだとすることを強調しており、その観点から、よりよい放送のことはを構築しようとしていたことをうかがい知ることができる。

第15回の委員会では、「ニュース原稿、語句の言い換え」を審議した後、次のような決議をしている。「ニュース放送用原稿文体ニ関スル件……ニュース放送用原稿ノ文体ハ『耳ノコトバ』ヲ基調トスル口語体ヲ採ルベキモノト認トム……」（『放送研究と調査』'90.1）と。その後、この決議をうけて、部内的に「ニュースの文体及び語法」という冊子を刊行し、その中でニュースを書く上で注意すべき点として33項目を取り上げ、詳細に述べているが、注目されるのは「ニュース原稿の分段は、耳で聞いて容易に理解できる程度に短く区切ること」と言っている点である。

放送におけるニュース原稿作成上の基本的なことを述べているのであるが、先に引用した送用語委員会の議論の結果でもわかるとおり、この点だけは今だに多くの問題点を残していると言わざるを得ない。このことは、長く報道の現場の経験を持つ松岡新児氏（現・日本大学教授）が次のように指摘していることでもうなづける。「……ニュースのことはによる文章が新聞記事の文章とそれほど違わない場合が多いのである。新聞記事の文章は文字による表現であり、放送による文章は音声による表現である。受け手にとっては、目で読むのと耳で聞くのとの違いがある。この両者の間には理解力という点でかなり大きな違いがあるにもかかわらず、新聞文章と放送のニュース文章の間にあまり差がない場合が多い……」（『NHK放送文化研究所年報』35）と。いささか引用が長くなったが、ニュース原稿に関する放送の現場の悩み、問題点が端的に示されていると言えよう。

委員会はその後、現在の送用語委員会という名称に変わるのだが、もちろん、今日に至る長い歴史の中で、放送のことは・表現等に関して多くの成果を上げてきたことは言うまでもない。

*ニュース文体とレポートの文体の違いはあるのか

放送におけるレポートについては先に若干ふれているが、ニュースの文体を考える上で、レポートとは何かということも検討しておく必要があるだろう。

ラジオの時代には、現場から人がニュースを伝えるレポートという形式は少なかったと思う。テレビ時代になって、それも中継器機類の進展などに伴って定着してきたものと言えるだろう。ニュースの質の変化、形式の様変わり等もある。

ニュース番組の中にレポートという新しい形式が誕生し、今まで主として放送の伝え手（音声表現者）はアナウンサーだったところへ、現場では記者が、カメラマンが、またディレクターも参加するというように、そしてもちろん最近では、そのことを職業とするリポーターという人たちが出現するというように、まさに今表現者の自由化の時代であり、極端な言い方をすれば誰でもが表現者になれる時代である。

NHK、民放を問わず放送局では、放送ジャーナリストは、取材ができること、レポートができることを要求される時代である。言い方を変えれば、レポートができなければ放送ジャーナリストとして認められないということにもなりかねない。

しかし、今リポーターは誰でもできる、あるいは誰でも担当する時代とはいえ、初期の混乱期から比べると、放送局のプロの中でも、できる人とできない人へと選別される時代になっているということが、一方では言えるかもしれない。それだけ視聴者の耳も肥えてきているからだ。

とうのは、こういうことだ。

NHKの中でも、特に報道に携わる記者やカメラマンがリポーターとして登場するようになった初期の段階で、音声表現の基礎訓練ができていない記者やカメラマンのリポートが聞きにくいという苦情の電話が、しばらくの間放送局に寄せられていた。

なぜなのか。それは、アナウンサーというしゃべりのプロの放送を聞き慣れた耳には確かに耳障りな点があったということであろう。声の質もある。しゃべり口調もある。そして、何よりも耳障りだったのは（と、筆者に思えるのは）、記者がリポートと称して、ニュースの書き原稿をそのまま読んでしまったことだと思う。読んで伝えることに関しては、プロであるアナウンサーに敵うものではない。

そこから、アナウンサーではない新たな音声表現者の葛藤が始まったということが出来る。先の磯村氏のことばにも大いなる刺激を受けたことは間違いない。

現場でのこうした葛藤は、ニュース文体と音声表現の関係を考えることにもつながっていく。

『放送研究と調査（'88.11）』が、「報道リポートを考える」という座談会を掲載している。座談会の出席者は、NHKの報道現場の第一線で働く記者やアナウンサーである。

記者—特に、アナウンサーのリポートはセンテンスが非常に短い。記者は文章表現が頭にあるのか、どうしても長いセンテンスになってしまう。

アナ—最初のニュース原稿は新聞の真似ということもあって書きことばだった。その反省から「話しかけ調」が出てきて話しことばに近づいた。話しことばで伝えればわかりやすい。現場でしゃべってみる。しゃべったことを基に原稿を書く。

記者—視聴者は、原稿を聞くのもリポートを聞くのも同じ。文章を書き分けるのはおかしい。

記者—原稿も本来視聴者には、話しことばとして伝えているわけで、原稿とリポートが同一化していく流れの中にある。

この座談会の中でも触れていると思われるが、同じリポートでも、アナウンサーはしゃべることからリポートに入り、記者は書くことからリポートに入ったと言える。もし、両者のリポートに違いがあるとして、つまりどちらが聞きやすいかわかりやすいかということは視聴者が判断することではあるが、ここで一つ言えることは、リポート形式でニュースを伝えるためには、そこで使われる文章・ことばは限りなく話しことばに近いことが理想だということであろう。

今、放送されている記者リポートは、NHK、民放を問わず、ほんの一部の人を除き、いずれもことばは比較的硬い。つまり、依然として書き原稿のニュースにあるような、同じように硬いことばが多いということである。つまり、先の座談会にもあるとおり、書くという習性のある記者は、リポートをするときに、まず書いてみる、しかも書きことばで書いていみるとい

うところから始まると思われるので、その点で聞く側に硬さを感じさせてしまうのではないだろうか。したがって、リードニュースの原稿もそれなりの硬さを持っている、あるいは視聴者に硬さを感じさせてしまう、と言わざるを得ない。

記者リポートが話しことばになれば、ニュースとして書く原稿も自然と話しことば調になっていくはずである。

* “読みニュース”を自然体論では、どのように読むのか

アナウンサー集団は、今“読みニュース”に関して「自然なイントネーション」を強調する。このことは、冒頭にも触れているが、従来から言われてきた悪しき「NHKアナウンサー調」、つまり「独特な節」「調子読み」などを徹底的に排除し、聞き手の生理に合わせた“読み”を確立しようと言うものである。

このことに関して、山田誠浩氏（現・NHK札幌放送局エグゼクティブアナウンサー）は、かつて名古屋管内の若手アナウンサーの「音声表現」の指導に当たって、「私たちの表現の基本は論理的に整理した情報を自然なイントネーションで『意味どおり』に伝えること」だとした上で、次のような反省をしている。「どうも若い人たちに『読み下し』について誤解があるという気がしています。意味どおりに表現するために、途中で持ち上げ強調することなく自然なイントネーションで読み下だして表現することがポイントであって、ただやみくもに読み下だしたのでは逆に自然なイントネーションでなくなってしまうことを確認する必要があると思いました」（NHKアナウンス室部内紙・週刊『アナウンス』vol110）と。

この発言は、冒頭にあったベテランアナウンサーの危惧につながる発言と受け止めることができる。読み手の生理に合わない“文体＝文章”を、自然なイントネーションで読むことの難しさを示すものだと言うことでもあろう。

ところで、辞典（岩波国語辞典）によれば、話しことばは「日常生活で口頭でやりとりする時に使うことば」であり、書きことばは「文章を書く時に使うことば」である。さらに、話しことばは「文が比較的短い。文の順序が正常でない場合がある。同じ文やことばを繰り返すことがある。言い差しで文を終わることがある。文の成文の一部を省略することがある。指し示すことばが比較的多い。漢語が比較的少ない。……」であり、書きことばは「文が比較的長い。同じ文やことばを何回も繰り返すことが少ない。言い差しで文を終わることが比較的少ない。指し示すことばが比較的少なく使われる。漢語を比較的よく用いる。……」である。

また、一般に、放送のことばは「話しことば」であると、よく言われる。そして、ラジオ時代の昔から、「放送のニュース原稿は目で読まれることを目的として書くのではなく、耳で聞かれることを、つまり音声として表現された時のことを考えて書くべきだ」と言われ続けている。

が、ニュース文章はなぜか依然として、ここに示した「書きことば（新聞の文章）」の範疇から抜け出せないでいる。先の座談会の発言の中にもある「ニュースは、時間的な制約の中でできるだけ多くのことを伝える」という宿命にあるからか。

ニュースが、“リードからトークへ”と言われるようになった今日、トークの分野におけるニュース文章に若干の改善は見られるものの、全体としては「依然として抜け出せないでいる」と言わざるを得ない。

* ニュース文章を読み の 自然体へどこまで近づけることができるか

元モーニングワイドのキャスター松平定知氏（現・NHKエグゼクティブアナウンサー）は、「ニュースの文体と音声表現」（NHK『語りことば委員会』'86.7）の中で、ニュースキャスター論を展開しながら、読み手側の論理としての「ニュース文章リライト例」を提示している。

〈元の原稿〉

きのう、海外の外国為替市場で、アメリカの大手自動車メーカーが、大量に円を買ったことをきっかけに、投機筋が一斉に円を買い進み、円は一時1ドル、163円台まで高くなりましたが、こうした動きを受けて、今朝の東京外国為替市場で、円は1ドル、164円50銭と、おととい記録した最高値を、あっさり更新する形で取り引きが始まり、その後も日銀の円売りドル買いの介入にもかかわらず、その規模が小さかったこともあって、円はジリジリと値を上げて結局、今日の終値は、164円95銭となり、163円を突破して史上初めて164円台と、最高値を更新しました。

これは、よくある一般的な放送のニュース原稿であり、語末を除けば新聞の文章と変わりがない。

〈書き直した原稿〉

円は史上初めて、1ドル、164円台になりました。東京外国為替市場、今日の終り値、1ドル、164円95銭、史上最高値です。

きのう、海外の外国為替市場で、アメリカの大手自動車メーカーが、大量に円を買った事がきっかけになって、投機筋が一斉に円を買い進み、円は一時、1ドル、163円台まで高くなりました。この海外市場での円高傾向を引き継いで、今朝の外国為替市場は、いきなり1ドル、164円50銭から取り引きが始まりました。これは、おととい記録した最高値を上回る数字です。その後、日銀は、円売り、ドル買いの介入に入りましたが、その規模は小さく、円高傾向に歯止めをかけることはできませんでした。結局、今日の終値は、1ドル、164円95銭。史上初めて164円台を突破、最高値を更新しました。

原文の事実関係をすべて入れ、無理な息つぎをしないで読みやすくかつわかりやすく書き換えたとしている。

確かに、原文の300字近い長い文章（書きことばの一つの特徴）に比べて、読点もいくつか入り読みやすく（話しやすく）なっている。これだと、自然なイントネーションで意味どおり読み下していくことができそうだ。しかし、耳で聞いてわかりやすい、話しことばに近いものになっているかどうかという点では、多少疑問がないわけではない。そして、もう一点、このようなリライトが現場で簡単にできるものでないことはまた自明のことである。権限上の問題があり、また読み手がそれだけの時間的な余裕も持てないであろう。

ところで、すでに述べたとおり送り手側の論理として、ニュースの時間帯によりそれがキャスターニュースなのかリードニュースなのかということがあがるが、受け手側にとってはニュースはニュースである。問題は、受け手にとってニュースのプレゼンテーションがわかりやすい

“ニュース”

かわかりにくい、伝え手に親しみがもてるかもてないか、トータルとしてそのニュースに信頼がおけるかどうかであろう。その意味で、これまで述べてきたように、放送におけるニュースの文体（文章）には、新聞文章とはちがう「話しことば的なやわらかさと、書きことば的な論理性を持った」新たな文体の確立が望まれるし、音声表現には、聞き手に抵抗なく受け入れられる“自然”な“話体”（とも言えるもの）が必要とされるのであろう。

NHK『アナウンス読本』はこう言う。

…キャスターになる条件として、起こりうるいかなるニュースについても、それを理解し評価できる知識をもって、ただちに処理できる能力を持っていてはならない。視聴者が、このキャスターに質問したら整然とした答えを与えてくれるだろうという信頼感を持ちうるような人間で、そのキャスターが親しみをもちてニュースを語り伝え、同時に放送の特殊性として、不偏不党であり政治的にも公平であることが要求される…。

ここで言われる条件、資質を持ったニュースキャスターが、ニュースにおける新しい文体、話体を確立していくということになるのであろうか。

* 参考文献

- 『放送研究と調査』NHK放送文化研究所
- 『NHK放送文化研究所年報』NHK放送文化研究所
- 『月刊民放』コーケン出版
- 『放送50年史』日本放送協会編
- 『朝日新聞』朝日新聞社
- 『NHKアナウンス読本』NHK出版協会
- 田草川弘著『ニュースキャスター』中公新書
- 『週刊アナウンス』NHKアナウンス室部内紙
- 『岩波国語辞典』岩波書店